

第3章 流域の社会状況

3.1 人口

昭和40年から平成12年の小瀬川流域関連市町の人口の推移を表-3.1.1に示す。

上・中流域では、平成12年まで増加し、横ばいとなっている。これは旧佐伯町(現廿日市市)と旧大野町(現廿日市市)における広島市のベッドタウンとしての開発の影響と考えられる。一方、下流域は昭和50年を境に漸減しており、大竹市、岩国市、和木町ともに減少傾向にある。上・中流域の増加に比べて下流域の減少が大きいため、全体では減少している。

表-3.1.1 小瀬川水系流域関連市町の人口の推移(国勢調査)

(単位：人)

年次	上・中流域				下流域				合計
	佐伯町	大野町	美和町	小計	大竹市	岩国市	和木町	小計	
昭和40年	4,352	6,451	7,889	29,984	38,145	105,931	7,027	151,103	181,087
昭和50年	8,690	17,470	6,209	32,370	38,457	111,069	8,022	157,548	189,918
昭和60年	10,404	22,550	5,574	38,528	34,760	111,833	7,328	153,921	192,449
平成2年	10,679	23,802	5,426	39,907	33,236	109,530	7,086	149,852	189,759
平成12年	12,621	25,727	5,271	43,619	31,405	105,762	6,732	143,899	187,518
平成17年	11,953	26,442	4,855	43,250	30,279	103,507	6,441	140,227	183,477

注：平成12年10月1日当時の市町村

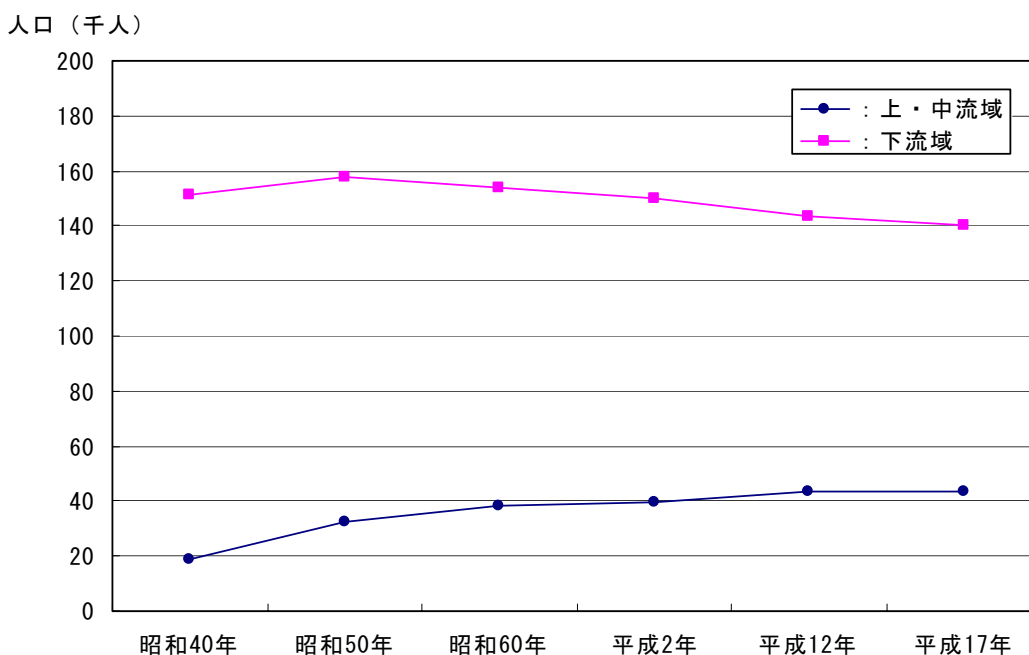


図-3.1.1 小瀬川流域関連市町人口の推移

3.2 土地利用

土地利用計画からみた小瀬川流域の土地利用は、流域の約90%を森林地域が占めている。

上・中流域(概ね指定区間)、下流域(概ね指定区間)ともに同じ傾向にある。人口集中地区は下流域の幹川に集中している。

下流域では都市地域の割合が全体の約20%を占めるのに対し、上・中流域では約2%程度にとどまる。一方、農業地域は下流域が約20%であるのに対し、上・中流域は50%を越えている。

表-3.1.2 小瀬川流域の土地利用

区域	流域面積 (km ²)	人口集中 地区面積 (km ²)	土地利用計画面積(km ²)						
			都市地域		農業地域	森林地域	自然公園 地域	自然保全 地域	
			総面積	市街化区域 ・用途地域					市街化調整 区域
小瀬川水系	343.3	2.5	14.8	3.4	11.4	178.7	306.4	4.7	4.4
割合(%)		0.7	4.3	1	3.3	52.1	89.3	1.4	1.3
幹川小計	128.5	2.4	8.1	2.8	5.3	58.2	117.1	2.4	2.1
割合(%)		1.9	6.3	2.2	4.1	45.3	91.1	1.9	1.6
指定区間外区間小計	43.6	2.4	8.1	2.8	5.3	10.3	39.3	0	2.1
割合(%)		5.5	18.6	6.4	12.2	23.6	90.1	0	4.8
指定区間小計	299.7	0.1	6.7	0.6	6.1	168.4	267.1	4.7	2.3
割合(%)		0	2.2	0.2	2	56.2	89.1	1.6	0.8

注:土地利用計画面積の各用途は重複する区域があるため、合計値は流域面積より大きくなる。

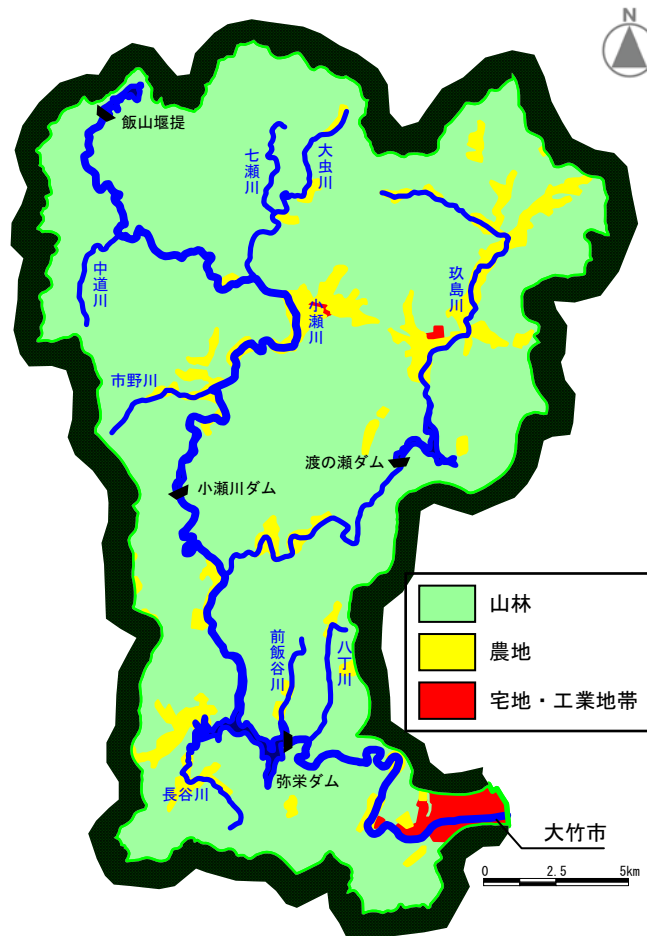


図-3.1.2 土地利用区分図

3.3 産業・経済

昭和40年～平成12年の小瀬川流域関連市町の産業別就業者数の推移を表-3.3.1及び図-3.3.1に示す。

上・中流域は、第一次産業就業者数が昭和40年の約6千人から平成17年には約1千人に激減しているのに対し、第二次産業就業者数は約4千人から約6千人、第三次産業就業者数は、約5千人から約14千人に倍以上増加している。

下流域は、第一次産業の就業者数が昭和40年の約8千人から平成17年には約2千人に、第二次産業就業者数は約31千人から約20千人に激減しているが、第三次産業は昭和60年以降、横ばい傾向である。

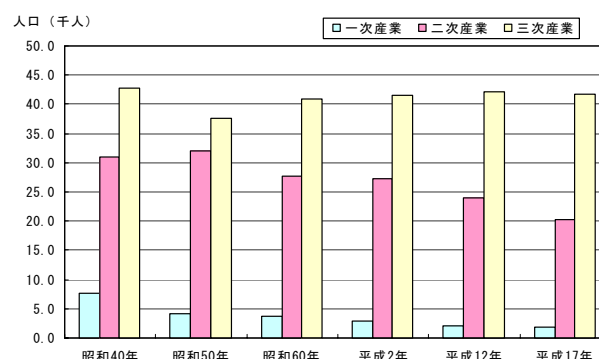
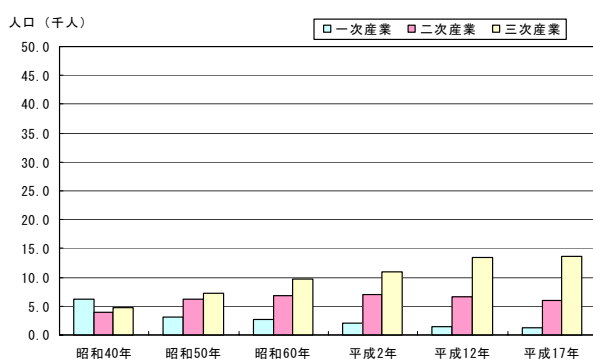
全体的に、第一次産業の衰退が激しく、第二次産業から第三次産業へと、産業構造が移動しているといえる。

表-3.3.1 小瀬川流域関連市町産業別人口の推移

(単位：人)

	区 分	上・中流域				下流域				計
		佐伯町	大野町	美和町	小 計	大竹市	岩国市	和木町	小 計	
昭和40年	第一次産業	2,516	1,076	2,621	6,213	1,393	6,068	246	7,707	13,920
	第二次産業	876	2,524	605	4,005	10,272	18,857	1,772	30,901	34,906
	第三次産業	1,252	2,557	938	4,747	15,585	24,590	2,570	42,745	47,492
昭和50年	第一次産業	1,227	530	1,357	3,114	652	3,463	76	4,191	7,305
	第二次産業	1,717	3,362	1,169	6,248	9,805	20,142	2,084	32,031	38,279
	第三次産業	1,736	4,451	1,047	7,234	7,820	28,395	1,384	37,599	44,833
昭和60年	第一次産業	1,053	545	1,015	2,613	604	3,121	64	3,789	6,402
	第二次産業	1,929	3,776	1,089	6,794	7,538	18,461	1,638	27,637	34,431
	第三次産業	2,506	6,087	1,081	9,674	8,269	31,165	1,537	40,971	50,645
平成2年	第一次産業	830	477	778	2,085	517	2,319	39	2,875	4,960
	第二次産業	2,096	3,775	1,080	6,951	7,154	18,890	1,326	27,370	34,321
	第三次産業	2,785	7,079	1,136	11,000	8,262	31,697	1,567	41,526	52,526
平成12年	第一次産業	596	341	425	1,362	400	1,626	17	2,043	3,405
	第二次産業	2,391	3,408	825	6,624	5,851	16,867	1,343	24,061	30,685
	第三次産業	3,612	8,491	1,224	13,327	8,740	31,556	1,758	42,054	55,381
平成17年	第一次産業	504	407	363	1,274	388	1,524	18	1,930	3,204
	第二次産業	2,080	3,161	679	5,920	4,973	14,106	1,172	20,251	26,171
	第三次産業	3,523	8,873	1,244	13,640	8,460	31,518	1,778	41,756	55,396

注：平成12年10月1日当時の市町



上・中流域

下流域

図-3.3.1 小瀬川流域関連市町産業別就業者数の推移(国勢調査)

小瀬川流域関連市町の平成14年の産業中分類別工業出荷額の集計結果を表-3.3.2に示す。

平成14年の工業出荷額は、上・中流域(旧佐伯町、旧大野町、旧美和町)は約850億円、下流域(大竹市、旧岩国市、和木町)は約7,600億円である。

上・中流域では、旧大野町が約554億円(65%)とウエイトが高く、主要産業は食料品(約203億円)、出版・印刷(約75億円)となっている。下流域では、大竹市が約1,843億円(24%)、岩国市が約2,156億円(28%)、和木町が約3,624億円(48%)となっており、パルプ・紙、化学工業の出荷額が高い。

下流部は、瀬戸内工業地帯の一部をなす工業地域を形成しており、この地域の流域に占める重要性がうかがえる。

表-3.3.2 小瀬川流域関連市町の工業出荷額(平成14年)

(単位：万円)

産業中分類	上・中流域			下流域		
	佐伯町	大野町	美和町	大竹市	岩国市	和木町
食料品	517,041	2,027,306	X	335,517	610,080	-
飲料・たばこ	X	X	-	X	97,756	-
繊維工業	-	-	-	-	X	-
衣服・その他	56,172	-	-	10,964	72,009	X
木材・木製品	528,932	31,455	-	54,176	544,478	-
家具・装備品	264,767	26,270	173,087	18,154	39,236	-
パルプ・紙	62,122	162,820	X	3,534,035	6,833,692	X
出版・印刷	140,407	745,385	X	58,802	124,090	-
化学工業	X	X	-	13,126,162	8,376,959	X
石油製品	-	X	-	-	X	X
プラスチック	73,987	187,230	-	797,634	535,356	-
ゴム製品	X	-	X	X	-	-
なめし皮	-	-	-	-	-	-
窯業・土石	X	X	X	X	1,127,248	-
鉄鋼業	-	-	-	-	121,700	-
非鉄金属	-	-	-	X	X	-
金属製品	86,514	X	-	97,616	225,774	X
一般機械器具	278,615	118,406	-	196,277	1,915,532	-
電気機械器具	X	X	X	-	85,260	X
情報通信機械	-	-	-	-	-	-
電子部品	-	-	-	-	-	-
輸送用機械	X	-	-	-	-	X
精密機械	X	X	-	X	-	-
その他	-	-	-	X	-	-
計	2,600,581	5,535,016	363,740	18,429,257	21,555,651	36,243,989
合計	8,499,337			76,228,897		

注：平成14年当時の市町

注)Xは秘匿数字(公表できない数値)。

出典：広島県工業統計調査、山口県工業統計調査

[小瀬川の水と産業]

藩政時代の産業は水と密接な関係があり、流域の大部分が農業に従事し、小瀬川の水が重要な資源として貢献してきた。また、小瀬川の水質は和紙生産には最適であり、小瀬川流域には多くの紙すき職人が活躍していた。

明治・大正時代になり、近代化の基礎が確立されてきていたが、引き続き農業と和紙生産が中心の時代が続いた。

昭和 20 年代以降、戦後復興を完了した日本経済は成長期に入り、技術革新によってめざましい発展をし、小瀬川下流地域も岩国・大竹工業地帯として石油精製、石油化学、製紙業、化学繊維等の小瀬川がもたらす豊かで良質な水を用いる大規模な用水産業の工場が誘致され、現在の瀬戸内工業地域の主要な地位を占めることとなった。



紙漉きの様子

出典：大竹市 HP



小瀬川河口の工業地帯

3.4 交通

小瀬川は人々の往来においても関わりが深く、小瀬川の渡しが山陽道を下って安芸の国(広島県)から周防の国(山口県)に入る関門で、官道の重要な位置にあった。この官道は、明治13年に海岸線を通るよう変更された。小瀬川の渡し船は、大正10年(1921)に両国橋が完成した後に閉鎖されたと考えられる。

川下りでは、古くは河口から牧尾の浜(現在の弥栄ダム地点)までは川舟や筏が往来し、木材、薪、木炭、紙など奥地の産物を岩国、大竹、玖波方面に運んでいた。大正末期には川底を掘って水深を深くして笹ヶ谷まで伸び、一時は弥栄まで通行できたという。この川舟は道路の開通によって馬車やトラックによる陸上輸送に移行し、次第に姿を消した。

現在の主な交通網は、国道2号が、高速道路では山陽自動車道が横断している。鉄道ではJR山陽本線、JR山陽新幹線が横断している。このうち、国道2号、山陽自動車道、JR山陽本線、JR山陽新幹線は下流部に集中しており、流域内における重要性の高さをみることができる。

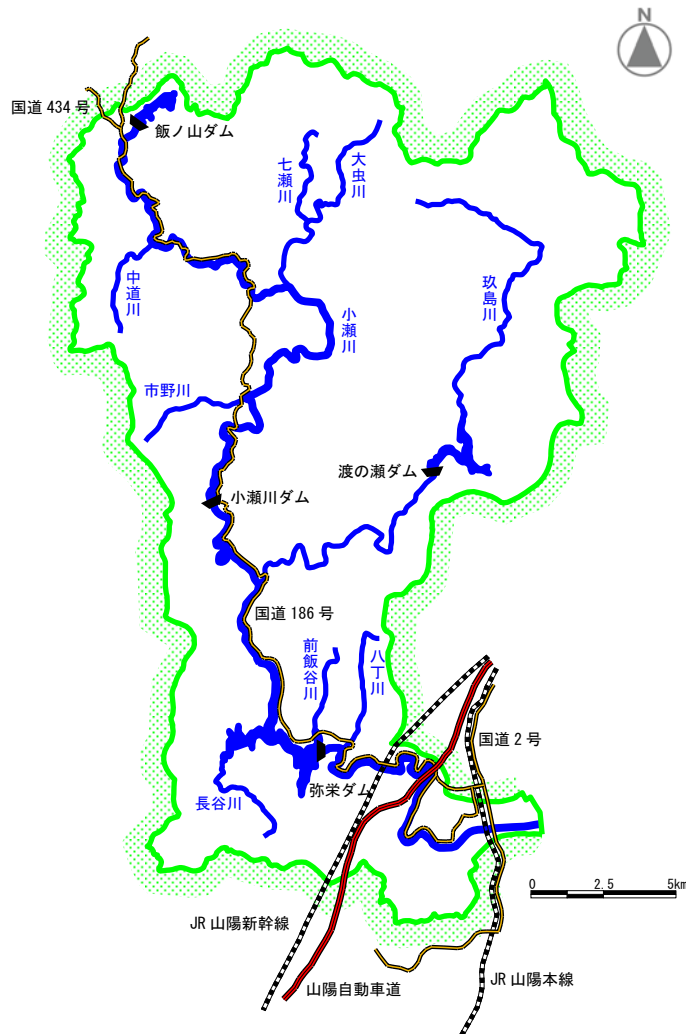


図-3.4.1 交通網図